教員氏名：大佐古　紀雄（保育学科／教授）

１．教育の責任（何をやっているか）

保育学科に所属し、主に、教員免許と保育士資格の両方で重要になる教育学の基礎を扱う授業や、２年間の総まとめとなる「保育教職実践演習」もオムニバスで担当している。学科における学生指導の基盤に位置付けられている「ゼミ」において、ほとんどの年度で１年、２年とも担任を持ってきた。また、併設の育英大学で兼担として、高崎経済大学でも非常勤講師として授業を担当している。また、群馬県立県民健康科学大学看護学教員養成課程や、看護系専門学校でも非常勤を担当した経験がある。

現在の主な担当科目一覧		
育英短期大学	保育学科	教育原理、教職論（幼）、保育教職実践演習など
	現コミ学科	教職論（中）
育英大学	教育学部教育学科	チームワークとリーダーシップ
高崎経済大学	教職課程	教職原論、カリキュラム論

２．教育の理念（なぜやっているか）

専門分野を研究するものとしての理念とその背景や経験　私は、教育学を専門としているが、その中でも大学や短大などを研究の対象とする「大学・高等教育論」を専攻し、大学や短期大学の質をよりよくするための制度（認証評価・質保証）を中心に多くの共同研究や個人での研究にかかわってきた。このように、もともとは保育や幼児教育を専門分野としていないが、こうした研究の背景から、保育者養成の質をよりよくするためには何ができるかも、自然と考えるようになり、今は研究テーマのひとつとなっている。

学生の学習に対する理念　私が担当する教職や保育士の科目は、基礎理論に関わる部分であり、幅広い学びが求められるため、学生にとっても難易度が高いものと受け止められている。具体例を使う、高校以前の学習の復習に立ち戻るなど、できる限りわかりやすくして理解を進めるように工夫しているが課題は多い。また、単に保育のための専門的知識として身につけるだけではなく、高等教育レベルの修了者として、これからの社会を「持続的に生きる（生き抜く）」ための知恵をつけるための授業を展開したいと考えている。

社会における大学教育の位置付け　保育は、社会活動を支える基盤となる仕事であり、その養成にたずさわる本学の教育は、社会に対する大きな責任をもつと考えている。

３．教育の方法（どのようにやっているか）

具体的な教育上の実践や教材の工夫　より確実な学習成果の達成を目指し、以下の工夫をしている。

①　講義系授業では、基本的にパワーポイントを使用。視覚的な理解の助けとしている。また、特に「教職論」では、ドキュメンタリー番組などを使用して、教職や保育者の意義、自分自身の保育職への進路選択について沈思黙考して考える機会を多く設けている。

②　講義を欠席した学生に対して、「自学補習」と題して、授業をスマホで収録した映像と配付資料を Google Classroom から提供し、さらに必要に応じて課題を提出させるようにしている。（なお、課題提出があっても原則的に欠席の扱いは変更しない）

③　定期試験に際しては、復習用問題を配付している。授業での学習内容に直接目を向けた復習を促すため、模範解答はあえて用意しない。

学生との関係構築のための工夫や配慮　学生に授業の振り返りを書かせる「リフレクションシート」で、学生の反応を確認しつつ、学生と共有した方がよい、あるいは面白いと思われる内容については、匿名にした上で次の回の授業で、自分のコメントを入れながら紹介している。講義系では、どうしても 1 対 1 のコミュニケーションが成り立ちにくいが、講義の後に、コメントを紹介した学生から声をかけられるケースや、他の学生のコメントに対する感想が次の回のコメントで出てくるケースなど、擬似的ではあるが 1 対 1 ないし 1 対多のコミュニケーションとしての可能性も持ち合わせている。このように、他の学生の学びを知る機会としても有効であるが、この紹介に時間を取られる傾向にあることが課題であり、現在は実施しない回もある。また、ごくまれであるが、記述内容で気になる点があった場合には、授業外で直接声をかけて話を聴くなどの個別対応を取ることがある。

４．教育の成果（行った結果どうだったか）

学生の学習成果　こちらの期待以上に学習成果を挙げる学生と、そうでない学生との二極化がさらに強まっている。2023 年度後期に保育学科 1 年生を対象に開講した「教育原理（幼）」の定期試験の結果を例としてあげてみよう。この表は、定期試験の結果の得点分布である。100 点満点で、10 点刻みでの分布を表にしたものである。（なお、このデータは学生にも公開している）

80 点以上の学生が約 28%（おおむね 7 人に 2 人）いるが、70 点台の学生がいったん少なくなるものの、60 点台から 50 点台の学生があわせて約 33%（おおむね 3 人に 1 人）となっている。グラフにすれば、「ふたこぶらくだ」のような形になる。

5．得点分布（調整前）　※最高点・最低点は非公開とする。

得点帯	90～	80～	70～	60～	50～	40～	30～	20～	10～	0～
人数	9	36	14	25	27	20	11	18		
累積人数	9	45	59	84	111	131	142	160		
%	5.6	22.5	8.8	15.6	16.9	12.5	6.9	11.2		
累積%	5.6	28.1	36.9	52.5	69.4	81.9	88.8	100.0		

他の講義系の授業でもこの傾向が強い。高得点を挙げている学生がそれなりの割合でいることから、「授業の内容や試験の難易度に大きな問題はない」ことはいえる。その一方で、このレベルにあきらかに対応できない学生もそれなりにいるともいえる。ただ、この層の状況は答案を見る限り多様である。答案と対話しながら読み取れるメッセージから目立つ傾向を挙げるとすれば、「用語や制度を覚えるのが苦手（記憶する力の問題）」「文・文章を書かせる問題は手が出ない（日本語の力の問題）」「はじめからあきらめている（学習に向く姿勢の問題などが考えられる）」といったことか。

学生による授業への評価　これらのことも影響してか、授業での学習に対応できる学生からの評価は高く、対応できない学生からの評価が下がるという、とてもわかりやすい現象となってしまっている。ただ、学習内容を安易に妥協して切り詰めることは、保育者養成の責任としてしてはならないことであると考えている。授業評価の結果をどこまで重要視すべきか、どこまでを保育者として本当に必要な素養として学習内容に盛り込むべきかも考慮しながら、ひきつづき、より確実かつ充実した学習成果の達成を最上位目標として、授業づくりを進めたい。

５．教育における今後の目標（これからどうするのか）

短期的な目標　これまでは、必要な専門用語や制度を覚えることも、苦手であったとしても、「専門職」として必要なことだとされてきた。この考え方は安易に捨ててはならないと考えている。しかしその一方で、AI（人工知能）が社会の営みに大きく幅をきかすようになってきている時代である。生きていく上で、解決すべき課題や知っておくべきことがあることに気づいたときに、検索や生成 AI などの手も借りながら、自力で適切な情報や知見にたどり着き、みずから考えることを可能にするための「社会を生き抜く持続可能なスキ

ル」を身につけるには、私の立場でどんな授業が構想できるか、向こう２～３年をかけて試行錯誤したい。

中期的な目標　ここまで書いた問題意識をベースにして、これまでになかったようなテキストを書いてみたいという素朴な希望がある。短期的な試行錯誤を経て、それこそ、書籍なのか動画なのか、はたまた他の形式になるのかも分からないが、私が高等教育の場から去った後でも（まだ先のことだろうが）、学生の学びに役立つような教材を遺したいとの淡い希望を持っている。

【添付資料】　※全部又は一部の現物を省略しています。

１　担当科目のシラバス

２　授業で使用しているスライドのサンプル

（2024 年 8 月 31 日現在）